

感冒(がんまお)

2019年3月26日(火) 天気、快晴

感冒は、中国語で「がんまお」と呼ぶ。もちろん風邪のことだ。この日私は、クラスメートの、金珉珠と韓美延を誘って、三人でキャンパスの一番高台にある学食(北山食府)で昼をとった。珉珠は、長いスパンで中国語学習に励むそうで、来年には北京の語言大学に移る話をしていた。美延と私はその聞き役だったかもしれない。その時までは、体調に異変はなかった。さて、午後宿舎に戻ると、疲れがたまっていたらしく熟睡することになった。夕方に目覚めると、どうも体の具合が良くない。喉がぜいぜいするし、鼻水も出る。体温計がないのだが、悪寒もするので発熱もあったと思う。

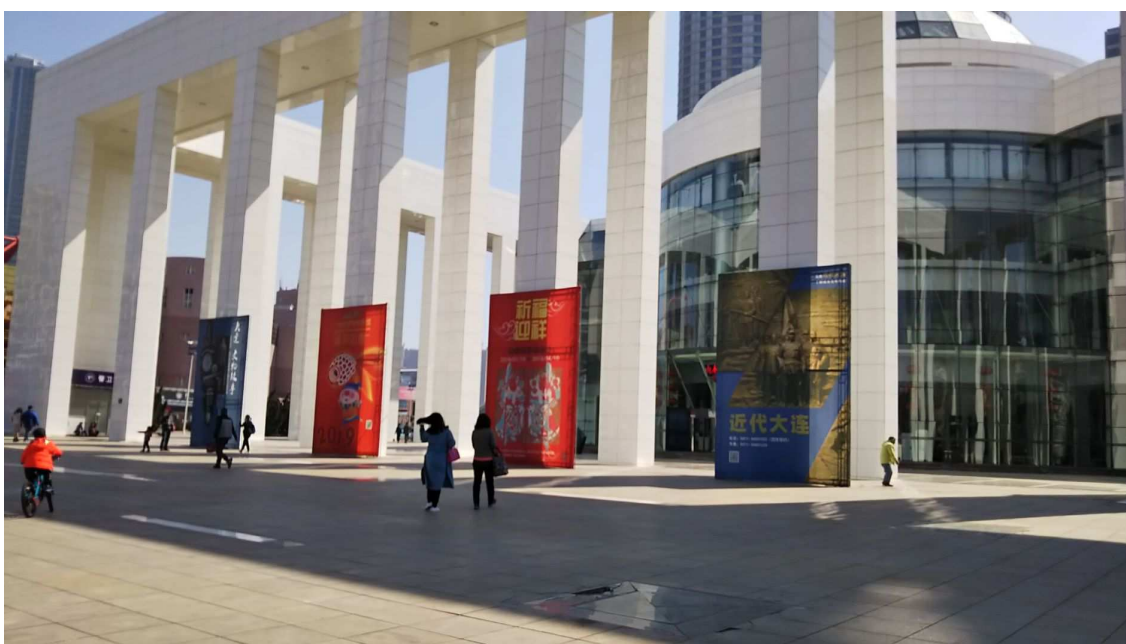
この時期の前後に、少なくない留学生の病欠があったので、感冒が私にも襲いかかって来たのだろう。それにしても、このだるさ倦怠感、尋常でなかった。翌日の27日は、初めて授業を休み、一日中ベッドで静養。しかし、老いのせいもあるのか、なかなか自然治癒では回復しそうもない。日本からは、漢方の胃薬は持参していた。しかし、風邪薬など無用とでも思っていたのかその用意がなかった。夕方、すでに何回か利用していた近くの果物屋に行き、レモンを購入。これを絞って飲むことにした。こんなことでは焼け石に水。そこで、宿舎の受付で劉金柱さんから、風邪薬を分けてもらい服用した。それでも、翌日も学校を休み、ベッドに伏しているしかなかった。

29日の金曜日、朝少しは良くなったので、授業には参加。珉珠には、感冒にやられたと話したりした。そして午後、初めて大学の診療所を訪ねた。2月に学生登録する際、学生用の健康保険に強制加入させられていた。問題は、適切な治療が受けられるかだった。例のフードコート、第一食堂の隣にある平屋の診療所には、女医さんもいたし薬局もあった。医者だから英語もできるかと思っただ、会話は中国語のみ。こちらの語彙力ではハンディがあった。それでも体温をはかり顔色などを見られて、適切な薬を出してくれたのではと思う。何と診療代は一元(17円)だった。一方、帰り際に渡された薬は、四種類で50元近くした。一つは抗生剤。一つは解熱剤。もう一つは喉を潤す甘く苦い飲み薬。そして最後に鼻の炎症を抑える薬だったと思う。

金曜を含む週末の三日間、ベッドに伏したまま、完全な回復を待った。繰り返しになるが、老いのせいか、回復は緩慢で心細い思いが続いた。それでも週明けには授業に復帰するつもりでいた。課題などどうなっているか、と思った時、スマホで WeChat を使う相手が、金晨星しかいないことに気づいた。晨星からは、連絡用にこれが使われるようになった時、直ぐに友達申請が来ていて、

応じたもののそのままにしておいた。初めて、その回路を利用して課題の範囲を聞くことができた。日曜の午後、漸く体調が回復して来た。おかげで課題も準備できたし、4月1日の月曜には授業に復帰することができた。嘘ではありませんよ、念のため。

現在のコロナウィルスの騒ぎで、感染症の本などを読み漁る毎日だが、異世界から入り込む菌やウィルスには抗体がないため、人は激しく闘わないとなりませんと、そうした本には書いてある。なるほど、海外で生活を始める時、こうした未知の細菌などに遭遇し、しんどい目に会うのは、必然ではと思うようになった。それにしても、激烈な感冒だった。



星海広場付近の大連現代博物館

大連の近代史を扱う展示。24日の寒い日曜、ここを訪問した頃から弱っていたのかもしれない。